

夏目漱石内坪井旧居

Natsume Soseki and Uchitsuboi House

データで見る 熊本地震

2016(平成28)年4月14日21時26分、熊本県熊本地方を震源とする、マグニチュード6.5の地震が発生しました。その28時間後の4月16日1時25分にはマグニチュード7.3の地震が発生。14日の地震は「前震」、16日は「本震」と呼ばれます。内陸型地震で、マグニチュード6.5以上の地震の後、さらに大きな地震が発生するのは日本の地震観測史上初めてでした。余震も長引き、気象庁の発表によると、2018年4月30日までに発生した震度1以上の地震は4484回に上りました。長い間自宅に帰れず、車中泊する人が多数いました。



地震の規模 (気象庁発表による)

前震 M6.5 / 震度7 4月14日 21時26分
本震 M7.3 / 震度7 4月16日 1時25分

【4月14日21:26以降に発生した震度6弱以上の地震】

4月14日	21:26	震度7	熊本県熊本地方	16日	1:25	震度7	熊本県熊本地方	
	22:07	震度6弱	熊本県熊本地方		1:45	震度6弱	熊本県熊本地方	
	15日	0:03	震度6強	熊本県熊本地方		3:55	震度6強	熊本県阿蘇地方
					9:48	震度6弱	熊本県熊本地方	

被害 (2021年3月時点)

亡くなった人・・・50人

地震関連で亡くなった人・・・218人
(エコノミークラス症候群、転院による病気の悪化、自殺など)

大雨による二次災害で亡くなった人・・・5人

けがをした人・・・2,735人

建物全壊・・・8,642棟 建物半壊・・・34,393棟

一部損壊・・・155,203棟

文化財の被害額・・・936億円
(国指定、県指定、市町村指定および未指定文化財)

出典:熊本地震
デジタルアーカイブ



夏目漱石 内坪井旧居

明治の文豪の
暮らしぶりを今に
英語教師から小説家の道へ



夏目漱石



庭には、漱石の長女筆子が生まれたときに産湯に使ったという井戸がある。

『吾輩は猫である』『坊っちゃん』など数多くの名作を生み出した小説家・俳人の夏目漱石は、1896(明治29)年、第五高等学校(現在の熊本大学)の英語教師として熊本に赴任した。

漱石の熊本滞在は4年3カ月だったが、この間に6つの家に移り住んでいる。最初は光琳寺の家(現熊本市中央区下通一丁目)。ここで鏡子と結婚式を挙げる。2番目は合羽町(現坪井町)。3番目は飽託郡大江村(現新屋敷一丁目)の大江旧居で、現在建物は、熊本市中央区水前寺公園に移築されている。

4番目の井川淵町を経て、5番目に住んだ家が内坪井旧居(第5旧居)だ。1898(明治31)年、五高の教頭で漱石の親友だった狩野亨吉が、漱石夫婦のため自分の住む家を提供したものである。

漱石は第5旧居で、熊本では最も長い1年8カ月を過ごす。この家で長女筆子が誕生。庭には筆子の産湯に使ったという井戸が残っている。



旧居には夏目漱石全集などの本が並べられている。

後に鏡子夫人が「熊本で住んだ家の中で一番良かった」と語ったといわれている。

物理学者で優れた随筆家となった寺田寅彦は、漱石の五高時代の教え子だった。寺田は俳句を見てもらおうと、漱石の自宅を訪ねている。「まるで恋人にでも会いに行くような心持ちで通ったものである」と記している(寺田寅彦「夏目漱石先生の追憶」『寺田寅彦全集第六巻』)。

寺田はあるとき、漱石の家に書生として置いてもらえないかと相談したところ、別棟の物置を案内された。その時は曇もなく、ほこりだらけだったので、すっかりしよげたという。その物置「馬丁小屋」も敷地内に残っている。

漱石が退去した後は安田銀行後に富士銀行、現在のみずほ銀行)の所有となり、熊本支店長とその家族が住んでいた。1915(大正4)年

に大幅な改造がされており、洋館が増築された。1978(昭和53)年4月、熊本市の文化財(史跡)に指定。同年6月、記念館として開館した。漱石のレプリカ原稿や五高時代の写真、日本銀行から寄贈された漱石が描かれた千円札などが展示されている。

熊本地震では壁の崩落や、建物の傾きなどの被害があった。地震後休館していたが、復旧工事後の2023(令和5)年2月に公開が再開された。

漱石は生涯で30回以上引越しており、全国各地に旧居跡がある。このうち現存しているのは4軒で、当時の場所に残っているのは、第5旧居と、次に住む第6旧居(北千反畑町)だけ。第6旧居は2024(令和6)年、所有していた個人から熊本市が取得した。

漱石が住んだ当時の状態が残る旧居。右側の洋館は1915(大正4)年に増築された。



被災後のすがた

熊本市中央区内坪井町にある夏目漱石内坪井旧居（第5旧居）は、熊本地震で建物が傾き、壁がはがれるなどの被害を受けた。壁を全面的に塗り替え、瓦を葺き替え、建物の高さを調整する作業が行われた。



土壁は大きくはがれ落ちた。「元あったものを元の場所に」という方針のもと、木材だけでなく壁に使われていた土も回収し、再び練り直して土壁に使った。



建物が傾いたため、内部のふすまや板が外れ、展示品のケースも大きく動いた。そんな中でも明治時代のガラスは数枚割れただけで済んだ。



竹で編まれた「竹小舞（たけこまい）」があちこちでむき出しになった。竹は土壁の中に入っていれば長持ちするという。竹も大半は再利用した。



倒壊は免れたものの、障子は破れ、壁に亀裂が入り、地震の揺れの激しさを物語っている。



洋館の外壁も一部崩落した。庭も石碑や石塔が倒れた。熊本地震は前震も本震も夜の発生だったため、人的被害は出さずに済んだ。





傾斜を直すため、天井と壁は解体した。柱が載っていた礎石は動かさず、高さをそろえるために礎石と柱の間に栗の木を削って入れるなど、職人たちは緻密な調整を繰り返した。



増改築を繰り返してきた夏目漱石内坪井旧居では、文字が書かれた木材も出てきた。見つかった場所を記録し、またもとの場所に戻した。

元の土に新しい土を混ぜて練り直し、わらを入れて半年ほど寝かせた。わらが発酵して土の中で繊維だけが残ると、壁の強度が上がる。日本の伝統的建築の手法の一つだ。





可能な限りもとの部材を使い、伝統的な手法で組み立てた。理由は不明だが、敷居と鴨居の寸法がずれているところもあった。足りないところに木材を入れて調整した。



1915(大正4)年に増築された洋館も傾斜したため、天井を外して傾斜を直した。板を一枚一枚慎重に外し、修理してまた元の場所に戻した。





復旧現場から

100年以上の古い建物には
大工の工夫が凝らされている

「夏目漱石内坪井旧居」は熊本地震で土壁がはがれたほか、建物が傾き、複数の柱と礎石の間に隙間ができた。半解体して壁を全面的に修復し、高さを水平にする工事が行われた。復旧にあたった株式会社島崎工務店（熊本市東区）の文化財建造物木工主任技能者、島崎雅夫さんに聞いた。



文化財建造物
木工主任技能者

島崎 雅夫 さん

土壁の土は「育てて」、再利用
ガラスは当時のまま生き残った

土壁ははがれたため、いったんすべて取り除いた。できる限り元の部材を活用しようと、土壁に使われていた土や竹も再利用した。土は新しい土と水、わらを加えて練り直し、田植え前の田んぼのような状態にして半年ほど寝かせると、わらが発酵して溶け、繊維が残る。すると「強度が上がり、壁が割れにくくなります。わらを混ぜることで土を育てるんです」と島崎さん。

土壁は竹を編んだ「竹小舞」に土を塗って作る。竹は虫が入るなどしたものを除くと、3分の2ほどは再利用が可能だった。旧居の土壁は京都を発祥とする伝統的な聚楽壁、砂壁などさまざまな種類がある。同じ種類にして、色も慎重に合わせた。

ガラスは数枚割れただけで済んだ。特殊なガラスで、波打っているように見える。島崎さんは「このガラスの製法は、今は使われていません。割れると再現が難しかったため、被害が少なくてよかった」と語る。漱石が見ていたガラス越しの景色を現在も見ることができる。



波打ったように見える明治時代のガラスは、数枚割れただけで済んだ。漱石が見ていたガラス越しの風景を今も見ることができる。

場所によって高さのずれ数センチ
柱と礎石の間に
栗の木片を入れて調整

床は場所によって高さが数センチずれ、傾いた。「水平でなくなること」を建築用語で「不陸」と言います。この不陸を修復するため、高さに合わせて柱と礎石との間に木片を入れて調整しました」と島崎さんは解説する。間に入れる物は支物（飼物）という。

支物には、ずれが9ミリ以下なら鉛の板を使用。それより大きい場合は木材を使った。「水に強く、硬くて割れにくい栗を選びました」。床が水平になるよう、細かく計測して支物を作り、一つひとつはめこんだ。

建物のずれに伴って瓦も大きくずれた。割れたものもあったため、風雨に強い防災瓦にふき替えた。



礎石と柱の間に「支物」を入れた。



洋館の屋根部分。複雑な組み立て方がしてある。



継ぎ手一つに、組み方一つに
「建物が長持ちした答えがある」

旧居は漱石が退去した後の1915（大正4）年に改修されるとともに、洋館などが増築されている。洋館の屋根を解体したところ、「瓦ぶきにしては梁が細めだと思いました。当初の屋根は瓦ではなく、金属屋根などだったかもしれない」と島崎さんは見る。旧居は何度も改修されており、その過程で瓦が載った可能性もあるという。

梁は細めだったが、斜めに梁を入れるなど複雑に組み立てられていた。元通り復旧するとともに、瓦に耐えるよう補強を加えた。

長く文化財など古い建造物の復旧に携わってきた島崎さん。「建物の造りを見てみると、そこに建物が長持ちしてきた『答え』があるんです。継ぎ手一つに、組み方一つに、100年以上存在してきた理由が見えます」。当時の大工たちの苦勞がしのばれる。



復旧した夏目漱石内坪井旧居





安々と海鼠の如き子を生めり

―内坪井旧居での長女筆子の誕生に際し、
漱石が詠んだ俳句。



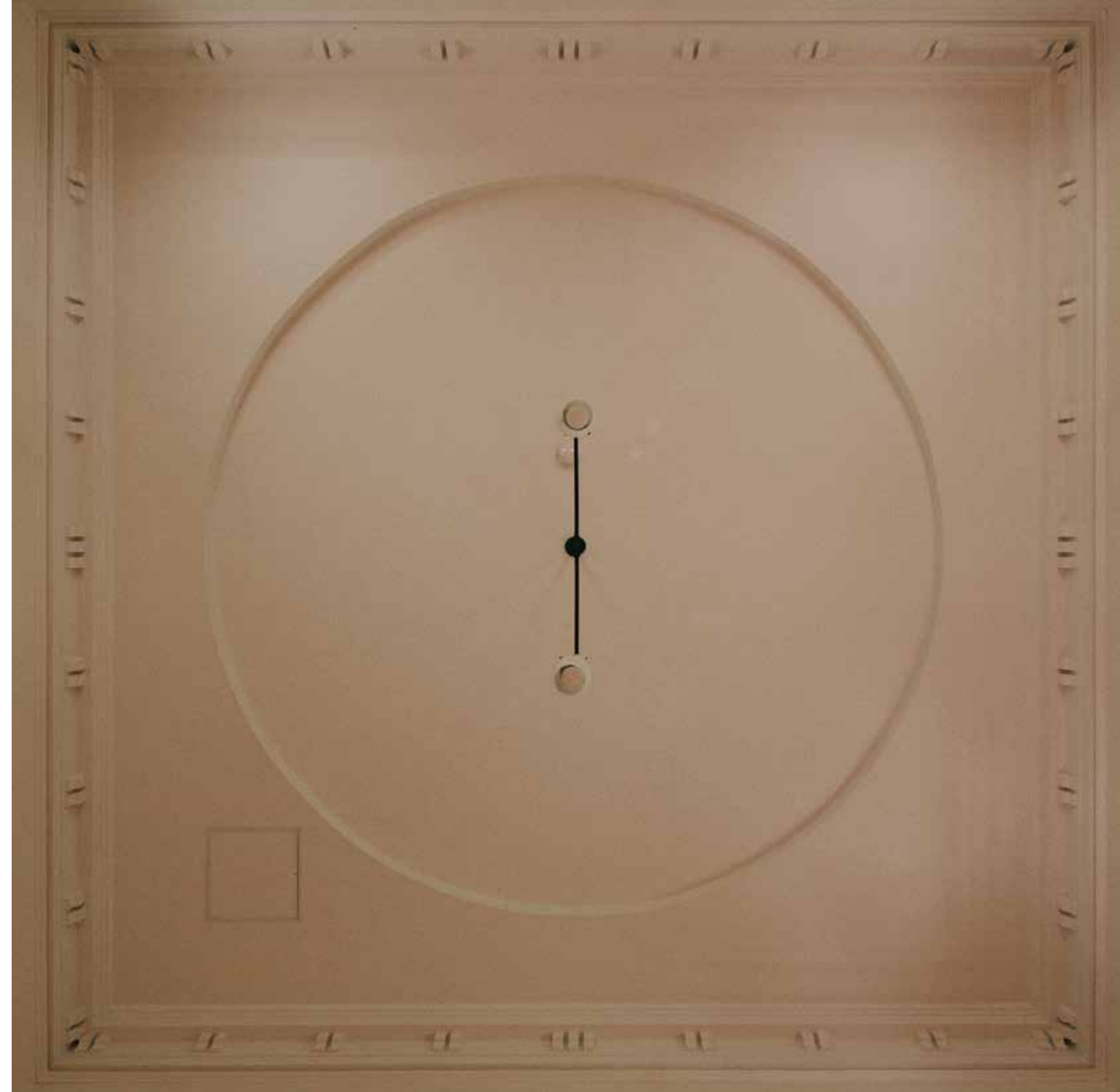
庭では昔ながらの石があり、冬には椿が花を咲かせる。懐かしさを感じ、ほっと落ち着ける空間だ。



ひなたぼっこをしながら「会議」を開く猫たち。猫に会いたくて訪れる人も多いという。







ゆかりの人

俳人が集う

「サロン」だった旧居

漱石は熊本で

一人前の教師になった

熊本県立大学文学部教授の半藤英明さんは、夏目漱石をはじめ熊本ゆかりの文学者について研究・発信している。半藤さんに、夏目漱石内坪井旧居（第5旧居）の役割や熊本時代の夏目漱石について聞いた。

俳句同人結社も娘も

この家で生まれた

― 漱石にとって、
第5旧居はどんな家でしたか？

半藤 熊本で住んだ6つの家のうち、最も長い1年8カ月の間住みました。教壇に立っていた第五高等学校（五高、現熊本大学）からそう遠く

玄関から見た旧居。漱石を慕って多くの若者たちが集まり、「サロン」のような場所だったという。



**熊本ゆかりの3作品に
教師らしいメッセージ**

― 熊本時代の漱石について
教えてください。

半藤 漱石は小説家として知られています。が、熊本に来たときは英語の先生でした。1893（明治26）年に大学卒業後、東京高等師範学校（現筑波大学）で教壇に立ちますが、最初のうちはうまくいかず、教師としての自信はあまり持てなかったと思います。

五高で英語を教えていたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の後任として、漱石に声がかかります。当時の五高は軌道に乗り、充実期を迎えていました。信頼できる同僚や優秀な学生たちに恵まれて、漱石本人も教師として充実した生活を送るようになり、自信を深めたと思います。その証拠に五高時代、英文学に関するたくさんの論文を書いています。熊本は漱石を教師として一人前にしてくれた土地。熊本の漱石を語る上で大切な観点です。

漱石の作品のうち、『草枕』『二百十日』『三四郎』は彼が熊本で過ごしたからこそ生まれました。『草枕』は天水、『二百十日』は阿蘇が舞台で、『三四郎』の主人公は熊本の高등학교出身です。この3作品からは、漱石の教師らしいメッセージを読み取ることができます。私は漱石について「教師から小説家になった」のではなく、「教師が小説を書いた」と思っています。



旧居には机や火鉢も展示されている。
「吾輩は猫である」と言わんばかりに寝そべる猫。

熊本県立大学 文学部教授
半藤 英明 さん



なく、学生たちもよく来ていました。ここで句会を開くなど、若い俳人が集うサロンの存在だったようです。その一人に寺田寅彦がいました。1898（明治31）年には新俳句同人結社「紫溟吟社」を結成します。単なる住まいにとどまらず、結社が生まれ、長女の筆子も生まれた家です。ので、漱石にとって思い出深く、役に立った家と言えると思います。

全国に漱石ゆかりの家は多数ありますが、移築せずに当時の場所に立っているのは熊本だけです。この内坪井旧居と、2024（令和6）年に熊本市が取得した第6旧居（中央区北千反畑町）の2カ所で、文化財としても非常に価値ある建物です。



熊本大学構内にある漱石の銅像。

**文化財は「保存」とともに
市民が「活用」してほしい**

― 旧居の活用法についてどうお考えですか？

半藤 アメリカの大学に調査に行ったとき、1600年代に建った歴史的な建物が生活の中で普通に使われている様子を見ました。日本では文化財は「保存」に重きを置いて、「使う」という視点はあまりありません。しかし、使っているからこそ、大切にしようという気持ちも生まれます。文化財である建物が復旧されたのを機に、身近にある文化財を広く市民に知ってもらえればと思います。



庭から見た旧居。増築を繰り返しており、中央部分が明治時代の建物だ。